

平成 29 年度第 7 回（通算第 93 回）

山口国際文化化学研究会へのおさそい

教員世話人 川口喜治

院生世話人 荒木麻耶 ビジネス・IL0・I7511

十亀陽太 中村光里

- 日時 平成 30 年 1 月 24 日（水曜日）16 時 25 分より
- 場所 B202（北キャンパス）
- 主催 大学院国際文化化学研究科
- 発表者 国際文化研究科 教授 安野早己

ネパール現代政治と民族誌的研究 高カースト（カス・アーリア）による先住性の「発明」と政治的反動

※今回は、安野早己教授のご退職を記念した研究会となります。

発表者は大学の出版助成を受け、西ネパールの高カースト村落での民族誌的研究の成果を『マスト信仰』（英文）として上梓することになった。このローカルな宗教実践は今、ネパールの全人口の 3 分の 1 を占めるカス・アーリアの政治運動のなかで大きな意義を帯びている。

10 年に及ぶマオイスト人民戦争（1996－2006）は、王政を廃止して共和国化するだけでなく、民族に基づく連邦制への道を開いた。ネパールの連邦制は、バラバラな諸民族が集まって連邦制を作るのではなく、統合されていたものを解体して連邦化するという困難なプロセスをたどる。ネパール全土に広く住む高カーストは、国家に分裂をもたらすとして民族連邦制に反対している。一方で、高カーストは、ヒンドゥー王国ではなく世俗的な多民族国家となったネパールで、非ヒンドゥーであるジャナジャティから（マオイストによる呼び方を踏襲して）「封建的搾取者」と批判され、さらに街頭行動ではネパールからの追放をほのめかすスローガンを浴びせられるようになった。そこで、高カーストのブラーマン・チェトリは、それぞれブラーマンサマージ、チェトリ・サマージという団体を組織して、自らの生存と権利の保障を新憲法に明記することを要求するようになった。留保制度や連邦制に直面した高カーストは、カースト名ではなくヒンドゥー化以前の、マスト神を信仰するカス・アーリアという民族名を名乗って、ネパールにおける先住性を強調し、自らも留保の対象となることを要求し、民族連邦制に反対する大規模街頭行動を組織し、第一次制憲議会を解散に追い込んだ（2012 年）。2015 年 9 月に制定された新憲法は、連邦制・留保制において後退している。

発表者は、1983 年以来、西ネパールの、カスと呼ばれる人々の憑依神マスト信仰（Masta Cult）の民族誌的研究を行ってきた。ジウムラ郡のブラーマン村落での現地調査は、1983-1984 年、1986 年、1993 年、さらに 2007 年、2008 年、2012 年に及ぶ。前半にはパンチャヤット制から複数政党制へ移行を経験し、後半の 3 回は、マオイスト人民戦争の当該村落社会への影響を探る目的であった。その後、村落を離れ、全国的に組織された、上述のカス・アーリア運動体を対象に調査を行っている。

ネパールの流動する政治のなかで、変遷を迫られる民族誌的研究の位置づけについて省察する。